

通巻850号を迎えてー第7代編集委員エッセイ

編集委員就任後の 2年間を振り返って

Modern Media



東京大学大学院医学系研究科
病因・病理学専攻 感染制御学分野
内科学専攻 生体防御感染症学分野 教授

つつみ たけ や
堤 武 也
Takeya TSUTSUMI

『モダンメディア』の編集委員に就任してから早くも2年が経過しました。就任前は、正直なところ自分に務まるのか不安でしたが、実際に関わってみると大変興味深く、月に一回の編集会議が楽しみな毎日となっています。編集会議を通して、これまでにいくつかのコンテンツ提案に関わってきましたが、実際に自分が提案した論文が掲載されると感慨深いものがあります。一方で、自分が良いと思ったテーマが必ずしも読者にとって興味深いコンテンツになるわけではない、ということをつかっただけであり、幅広い読者層を意識したテーマ設定や切り口を考える必要があることを、編集委員を務めることにより学ぶことができました。

私が編集委員となって初めて提案し最初に掲載されたのが「消化器内視鏡の洗浄・消毒標準化に

むけたガイドラインおよび内視鏡感染対策の現状」第71巻（2025年）5月号です（図1）。近年、国内外で消化管内視鏡に関連した多剤耐性菌のアウトブレイクが少なからず報告されており、私が勤務する医療機関でもアウトブレイクほどではないものの内視鏡が媒介したと考えられる耐性菌による感染症事例が最近あったこともあり、内視鏡の感染対策は個人的にも関心の高い分野でした。編集会議での議論の結果、ガイドライン作成に関わられた先生に論文を書いていただけたのは感慨深く、また非常にわかりやすい内容でありがたい限りでした。もともと個人的な関心でこのテーマを提案しましたが、読者の方から大変勉強になりましたという連絡があったことを事務局から伝えられた時はとても嬉しく、また安心しました。

コンテンツの提案だけでなく、去年は「検査・診断領域におけるAIの現状と未来」第72巻（2026

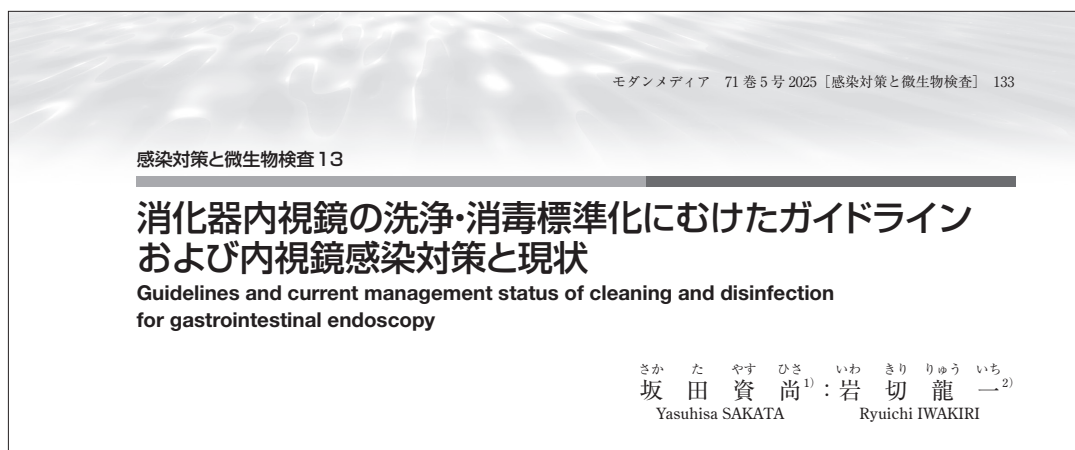


図1

年) 1月号という座談会(新春放談)の企画・司会進行を担当させていただきました(図2)。検査領域を含め医療の多くの場面でAIの活用が進んでいる一方で、様々な課題があるのも確かです。そのような背景のもと、専門家の先生を招いて、医療、特に検査領域でAIがどのように活用されているのか、そしてその将来と課題について議論することになりました。実際の座談会では、血液や尿の一般検査、微生物検査、病理検査の領域におけるAI状況について、それぞれの先生方が研究されていることも含めて幅広くお話を伺うことができ、司会進行を忘れるほど議論に没頭してしまいました。その中でも、AIによる最期のお看取りと採血不要の血液検査のお話は特に印象的で、これらがもし現実化すると、色々な意味で医療が大きく変化するのではないかという期待と不

安を感じさせられました。今後の医療を考えさせられる内容なので、まだ読まれていない方はぜひお目通しいただければと思います。

これからも読書の皆様にとって有意義で興味深いコンテンツの提案をしていきたいと思っています。私の現在の専門は感染症・感染制御ですが、以前より肝臓病、特にウイルス肝炎の研究・診療を継続していますので、この領域のトピックや変遷などについても読者の方々にご紹介をできればと思っています。

今後も皆様に愛され続けられるような学術情報誌『モダンメディア』となるよう、尽力していきたいと思います。そのためにも、ぜひ読者の皆様からご意見やフィードバックをいただけるとありがたいです。



図2